

## 封建制より資本主義への移行における 商業の役割について

——『国富論』第三篇についての一考察——

淡 路 憲 治

### 一、は し が き

『国富論』第三篇については、高島善哉氏が、「特に第三篇となると、専門のスミス研究家の間においてさえ、これまでほとんど棄てて顧みられなかった部分でいわば『国富論』全五篇中における一つの盲点の如き感があった」、とその『国富論』講義の中でいわれている。しかし、この第三篇については、すでにアンウィンは、その『経済史研究』で、第三篇には、経済史の最良の敘述が含まれているといい、またスミスは、最初の偉大な経済史家であり、かつ、いまなお最大の人である、と激賞している。わが国では、大塚久雄氏が、『国富論』で展開されている、スミスの資本投下の「自然の秩序」、また歴史発展の「自然の進路」の思想を重視され、その「自然の進路」と、逆の「不自然の進路」との対比に照応するものとして、イギリスとオランダの重商主義の相違を比較検討されている。大塚氏にあっては、『国富論』第三論が、それ自体として直接の研究対象とはされていないが、そこにつらぬかれているスミスの歴史観がまた、氏自身の歴史観の底流をなしているものと思われる。また内田義彦氏も、スミスの「自然の進路」の意義を力説される。すなわち、『国富論』全五篇を、旧帝国主義としての重商主義の、批判の書であるとされ、

しかもスミスの重商主義批判の根拠は、「自然の進路」にあるとされる。そのような問題意識のもとに全五篇の篇別構成を分析された「旧帝国主義批判としての『国富論』」という卓抜の労作のあるのは、周知のところである。なお、私の旧稿「アダム・スミスの貿易理論」は、大塚、内田氏らの先駆的業績にみちびかれて、主として第四篇を対象としたものであった。本稿では、第三篇を中心として検討しようと思う。ここでの分析視角は次のごとくである。

註① 高島編集『国富論』講義③、一五三頁。

② G. Unwin, *Studies in Economic History*, 1927, p. 18, p. 23

③ 大塚、「近代化の歴史的起点」、「経済建設の実態的基礎」(『近代資本主義の起点』所収) 参照。

④ 内田「旧帝国主義批判としての『国富論』」(『経済学の生誕』所収) 参照。

⑤ 「アダム・スミスの貿易理論」(上・中・下) 富山大学紀要、第八・九・十号所収。

『国富論』第三篇では、ローマ帝国没落後のヨーロッパ諸国の富裕の進歩が、取扱われている。その際、まず冒頭の第一章では、「富裕の自然の進歩」について語られ、いわば、その「自然の進歩」を尺度として、ヨーロッパの歴史が批判されているのである。スミスによれば、現実のヨーロッパの歴史は、「自然の進路」が転倒された不自然な形において展開されたが故に、きわめて停滞的であった。それでは、このよな転倒のユースたらしめた原因は何であったか。また、この歴史の進展において、都市の商業は如何なる役割をはたしたか。それらが第三篇において考察されている。スミスは、「転倒の」ユースをたどるヨーロッパにおいて、各国の富裕の進展は、彼の「外国貿易の子孫」としての製造業の発展線上においてではなく、むしろ、それを、「農業の子孫」としての製造業が圧倒するときにおいてこそ、順調に展開される、と主張する。しかも、この農村工業の全き発展を阻止しているのが、国家権力と結びつき内外商工業を独占する、「外国貿易の子孫」としての商工業であり、また彼等のための政策体系としての重商主義であるとして、それを真向から批判しているのが、第四篇である。ところで注意すべきは、この農村工業の展

封建制より資本主義への移行における商業の役割について(淡路)

富大経済論集

開が、ヨーロッパの歴史においては、外国貿易と都市の商工業の発展を契機としてなされたことの、スミスにおける強調である。つまり、スミスにおいては、一国経済の発展、産業資本の形成に於いて、(一)「外国貿易の子孫」としての製造業と、「農業の子孫」としてのそれとが、相対立する二つのコースとして対置され、(二)後者による前者の圧倒において、産業資本の確立を求め、(三)しかも、その過程において、農村工業の形成の歴史的前提として、「外国貿易の子孫」としての製造業のはたした役割が重視されている。(四)しかしそのことは外国貿易が直線的に農村工業の原因とされているのではなく、それが、「封建領主—農氏」の基本的対抗関係に、どう影響するか、という観点から分析されているのである。

このような第三篇でのスミスの問題の展開は、私をして周知のドップ、スィーギー論争を想起させる。それはまた、この論争の基盤である、マルクスの『資本論』第三巻・第二十章での、著名な移行に関する「二つの道」の理論を想起させる。マルクスにより提起され、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』第二版の序文で、より具体性をおびて、資本主義化における「革命の道」と「改良の道」として定式化された「二つの道」の理論はその源流を、右のスミスの見解に求めうるのではないか、というのが私の想定である。私は、さらに「封建制より資本制への移行に関する『二つの道』について」という論稿で、わが国において、この理論に関して、「生産者→商人」のコースを中心として考える大塚氏と、「商人が直接に生産者になる」コースを強調される白杉氏の両者の見解を対比し、主として白杉理論を検討した。<sup>⑥</sup>その際、白杉氏のマルクスに関する主張を検討したので、本稿では、氏のスミスに関する見解を問題にしたい。その点についての白杉氏の見解は、ほぼ次のごとく要約しうる。スミスは、(一)、都市の製造業は「外国貿易の子孫」として発展した、(二)、農村工業の展開も、「外国貿易の子孫」としての製造業の発展の結果としての農業の改良・発展を前提としてのみなされた、と主張した、というのである。(一)、(二)をつうじて白杉氏は、都市工

業についても、農村工業についても、その展開を、いわば直線的に外国貿易の結果として扱っているのが、特徴的である。すなわち、氏は「商業乃至商業資本の機能を資本制生産方法の成立の内的要因を規定したものとして積極的に認める」のである。

なお、白杉氏のこのような見解は、ほぼスィーギーのそれに一致する。したがって私は、本稿では、マルクスの「二つの道」の理論およびドップ、スィーギー論争を念頭におきつつ、若干の問題点を検討したいと思う。

註⑥ 『富大経済論集』第四卷・第一号・所收。

⑦ 矢口孝次郎『資本主義成立期の研』六三頁。このような白杉氏の特徴的な見解を示す一例を、次に引用しよう。

「かくして私は、資本制生産方法の資本主義的ないし營利的性格と世界的性格とは、すくなくとも発生的には、けっして単に狭義の生産力、すなわち生産技術の発展だけに由来するものではなく、資本制生産方法にまで止揚された封建的生産方法そのものが具有していた商品生産的性質、したがって、それを規定した中世商業に由来するところがあったと考える。封建的生産方法が資本制生産方法にまで止揚されたのは、前者がすでに中世の内部で商業に規定されて、すくなくともヨーロッパ的範囲における国際的な商品の生産にかかわる側面をもっていたからではなからうか。」（『近世西洋経済史研究序説』三一七頁）右の主張における、ドップを批判するスィーギーの主張との酷似を注意すべきである。

## 二 『国富論』における第三篇の位置

まず、『国富論』全五篇における第三篇の占める位置を問題にしよう。

周知のごとく、『国富論』の冒頭で、スミスは、重商主義の富概念を転倒させて、次のごとく主張する。

「すべての国民の年々の労働は、本来その国民が年々に消費するところのあらゆる生活の必需品と便益品とを供給する資源であって、その必需品と便益品とは、この労働の直接の生産物であるか、あるいは、その生産物を以って他

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

国民から購入したものである。」

このようにスミスにあっては、年々の国民の消費ファンドである労働生産物が、国民の富を形成することが、力強く宣言されている。

ここでは、貨幣のみが富であり、したがって貨幣獲得のための、流通過程とくに貿易部門のみが、富形成の唯一の部門ではない。国民の年々の消費ファンドとなる使用価値を生産する一切の生産部門が、ひとしく富を形成するのである。それ故に、国富の形成において、貿易差額したがって外国貿易が第一義的意義をもつものではない。それは、年々の労働生産物を基礎して形成される自足・自律的な国内市場を、外延的に拡充するための、従属的なものではない。

それでは、スミスにおける国内市場は、いかなる構造をもつか。上述のごとく、スミスは『国富論』の序文で、年々の労働生産物が国民の消費ファンドを形成し、このファンドが豊かであるか否か、すなわち、生産と消費の均衡のいかんによって、国富の増減は決定される、という。そして、この消費ファンドの状態を左右するのは、次の二つの事情である。その第一は、労働生産力の問題であり、第二は、市場およびストックの問題である。そして第一の問題が研究されているのが、第一篇であり、第二の問題が研究されているのが、第二篇である。

周知のごとく、スミスが労働生産力の発展の基礎として考えたのは、分業による協業、すなわち、孤立的な労働の社会的総労働への総合である。この際、個々の私的労働はいかなる分野でおこなわれようとも、社会的総労働の一回除部分として同時に社会的な性質をもっている。社会的分業のいきわたっているスミスのいわゆる「商業社会」Commercial society においては、あらゆる使用価値を生産する労働は、その種類のいかんを問わず等しく商品として等置され、交換される。これらの労働は、どこに用いられようと、追加的価値をつくり出すが故に、生産的であ

る。この追加的な価値が利潤および地代に分離される。このように、商業社会において巨大な社会的総労働に結合された労働こそが、社会の富裕の基礎であり、その生産物が各階級に所得として分配される。以上が第一篇をつらぬく論理である<sup>①</sup>。

第一篇での分析のごとく、労働は、ただ単に孤立的におこなわれるのではなく、分業労働として社会的総労働に結合され、それによって労働生産力が発展する。それでは、分業労働の形成は、何を条件としてなされるか。それは、直接の消費以上のストックの蓄積によってである。第一篇では、このことが所与のものされていたが、第二篇では、それが直接の問題とされている。分業労働を維持するためのストックは、年々の労働生産物から形成される。そしてまた、この年々の資本的資財が、生産的労働をいかに多く使用するかによって、生産される商品の価値の大きさが決定されるのである。

ところで、スミスによれば、労働は生産的労働と不生産的労働とに区別される。不生産的労働には僕婢の労働や、その他種々の労働があるが、これらの不生産的労働者はもちろん、生産的労働者も、あるいは全く労働をしない人々も、あげて生産的労働の成果である年々の労働生産物によって維持されねばならない。しかもこの年々の労働生産物の量には、一定の限度があり、不生産的労働者および全く労働しない人口の維持の増大にしたがって、逆に、それだけ生産的労働者のための生産物の量は減少せざるをえない。ところで、一国の年々の労働生産物の増大は、労働生産力の発展か、または生産的労働者の雇用数の増大かの、何れかの方法によらねばならない。前者は、すなわち第一篇の課題であったが、後者は、資本増大によらねばならない。しかも労働生産力を発展させる分業の展開も機械の導入も、資本の増大を前提としていいうることである。すべて資本は、ただ生産的労働の雇用にのみ充てられるのであるが、もし資本量が同一ならば、資本の用途の相異によって、その効果はいちじるしく異なる点を、スミスは強調する<sup>②</sup>。

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

ミスによれば、同じく生産的労働でありながらも、農・工・商の労働は、それぞれ剰余価値を生む序列が異なり生産される剰余価値量の大きさは、農・工・商の順にしたがう。したがって、同一量の資本投下の場合、雇用労働の種類によって、その効果は異なり一国の富裕の進展も異なる。すなわち、最も生産的な農業にまず最初に資本が投下され、農業の発展の結果おのずから溢れでる剰余が、都市の生活資料および製造業の材料となり、逆にまた、都市は農村に、その製造品を提供する。このように農村の発展を基礎として、両者は相互に市場となりあい、また、この両者を媒介するものとして商業が発達し、全体としての国内市場を進展させていく。かくして年々の総生産物は、ますます多量に、また国民の消費もますます多量になり、一国の富裕の進展は急調となる。このように国内において、資本が生産的である序列にしたがって、農↓工↓商の順に投下され、それにしたがって経済が発展するのが、ミスの「事物自然の進路」*natural course of things* あるいは「事物自然の秩序」*natural order of things* と呼ばれるものである。しかも、この国内市場の発展のおのずから溢れでる生産物の剰余が輸出され、それと交換に国内での必要品が輸入される——これがあるべき姿としての外国貿易である。この外国貿易においても、仲介貿易は最後の序列にあるものだとされている。この「自然の進路」について、大塚氏の明解な敘述があるので、いまそれを、そのまま借用しよう。

「まず『農業』がさかえ、そしてそのおのずからなる結果として『工業』がさかえる。ついで、そうした農↓工の繁栄のおのずからなる結果として『商業』がさかえるに至る。さらに『商業』のうちでも、まず『国内』商業、ついで『外国』貿易。さらにまた、後者のうちでも、まず『輸出』貿易、ついで『輸入』貿易、最後に『仲継』貿易と、こういう順序で繁栄が波及し拡充されていく。これこそが国民的な富裕の進展の『自然の経路』である。そしてこの自然な『順序』に従って経過するとき富裕の進展は順調であり、その速度も急調であるのに反して、之と『逆』のあ

るいは『不自然な』順序が辿られるならば、それに応じて富裕の進歩はおのずから停滯的たらざるをえない、とスミスは云うである。<sup>②</sup>

このような「自然の進路」の思想が、第一篇・第二篇をつうじての結論であり、これがスミス理論の中心的概念なのである。この歴史発展の理想像が、彼の思想をつらぬき、歴史および現実の批判の根拠となっているのである。この「自然の進路」を根拠とする、ローマ帝国没落以後のヨーロッパの歴史批判が、第三篇の課題であり、また彼の時代の政策体系である重商主義の批判が、第四篇の課題である。そして、以上の批判の上に立って、現実にはいかなる政策がおこなわるべきであるか、とくにその中心としての財政政策が考察されているのが、第五篇である。

註① 『国富論』全五篇の篇別構成をどうみるかについては、主として前述の内田「旧帝国主義批判としての『国富論』」を参考にした。

② この点、前掲、拙稿「スミスの貿易理論」(上)、参照。

③ 大塚『近代資本主義の起点』一〇八—一〇九頁。

### 三 第三篇について

ところで、このような「自然の進路」は、ローマ帝国没落以後の西ヨーロッパ諸国の歴史において、順調にたどられてきたか。いかなながら、否である。現実の歴史においては、あるべき姿としての「自然の進路」が転倒され、逆の「不自然な」進路がたどられてきたのである。

第三篇の序論をなす、第一章「富裕の自然の進歩について」において、事物自然の進路によれば、農↓工↓商の順序に資本が投下され、この国内市場の発展のおのずからなる結果として、外国貿易が展開さるべきである、と主張されている。すなわち、ここでは、第一篇、第二篇をつうじての論理の帰結である資本投下の順序および経済発展の

封建制より資本主義への移行における商業の役割について(淡路)



富大経済論集

「自然の進路」が、あらためて要約され、それが第二章以下の第三篇での敘述の起点となっているのである。

このような「自然の進路」がたどられねばならぬことは、また生活は、便益や奢侈に優先するものであり、生活資料を供給する農業の改良が、便益品、奢侈品を供給するにすぎない都市の製造業に先行せねばならない、ということからもいえる。また、人間は、本来、農業を好む傾向があり、その上、農業は最も安全な投資部門であるが故に、一般に資本が最初に投下さるべきは、農業においてである。かくて、スミスはいう。「要するに、人類の制度なるものが事物自然の進路を攪乱しなかったならば、都市の富の増進と発達はいかなる人間社会においても、その領地またはその地方の改良および耕作の結果であり、またそれに比例するであろう」と。

そして、そのような「自然の秩序」にかなった発展を示し歴史の理想像を現実に実現しつつあるのは、北アメリカにおけるイギリス植民地である、という。しかし、ヨーロッパ諸国においては、多くの点で転倒した進路をたどっている。それでは、このような転倒の進路をとらしめた原因は、いったい何であったか。それは、他ならぬヨーロッパ諸国の封建的土地所有そのものであった。その点が検討されているのが、第二章「ローマ帝国没落後ヨーロッパの旧国が農業を阻止したことについて」である。

ローマ帝国没落後に成立した封建制度は、大土地所有と農奴との社会であった。この社会では、不合理な相続制度（長子相続と限嗣相続）によって、土地分割がさまたげられた。というのは、土地所有が単に生活の手段たるのみならず、権力と保護の手段と考えられたからである。またここでは、小作人は領主の臣下であり、領主は小作人の裁判官であり、立法官であり、また戦時の将師であった。領主の土地財産の安全、また彼が居住者にあたえる保護は、彼の土地財産の大きさに依存した、とスミスはいう。

スミスは、封建制下の農民形態について奴隷 *slave* 折半農 *metayer* 農業者 *farmer* の、三つの段階を区別し、農

業生産力の発展を、順次この三形態の推移にしたがって検討している。第一段階の奴隷というのは、奴隷制下のそれではなく、封建的大土地所有制下の土地の占有者 *occupier* であり、小作人 *tenant at will* であり奴隷に比してやや緩かな支配下にある者である。第二段階の折半農というのは、領主が彼等に農耕に必要な全資財を供給し、生産物は、それら資財の保持のために必要な分だけ差引いた残りを領主と折半される農民である。第三段階の農業者あるいはヨーマンリー *yeomanry* (スミスは、両者を一括してとらえている) というのは、自己の資財をもって耕作し、一種の地代を支払う農民であり、これは最後の段階であり、もっとも自由な農業経営をおこなうものである。

第一の段階である奴隷労働による大土地所有下の、農業生産の状態はどうか。大土地所有者が、農業の大改良家であることは全く稀である。大土地所有者は、自己の領地を防衛すること、また彼の支配権を隣地に伸長することに汲々としており、土地の耕作や改良に意をそそぐ暇はない。たとい、その暇があまとしても、彼にはその意志も能力もない。奢侈欲望の故に、彼は、商業的企画に心が向かないし、またその能力にも欠けている、という。このようにスミスにおいて、封建領主の基本的性格が、(一)権力の維持と拡大、(二)、奢侈欲望、と明確に述べられている点は、記憶さるべきである。他方、奴隷もまた土地の改良者ではありえない、なぜならば、彼の一切の労働生産物は領主のものであり、彼は財産をもつことは許されず、彼に保証されているのは、ただ最低の生活のみであるからだ。自己の労働成果を全く享受しえない奴隷は、労働意欲をもちうるはずはない。彼の望むところは、ただ一つ、できるだけ多く食って、できるだけ少く働くことである。したがって、奴隷労働は結局もっとも高くつく労働であり、労働生産力の発展は望みえない、とスミスは強調するのである。<sup>②</sup>

註① *Wealth of Nations*, Cannan ed., Vol. I, p.358. 大内訳・第二分冊、一八五一六頁。

② スミスは、封建制下の農民の第一段階を、奴隷と規定し、しかもそれは、奴隷制下の奴隷とは異なるものとしていることは封建制より資本主義への移行における商業の役割について(淡路)

さきに述べた。しかし、実際の叙述においては、同一の奴隸という名称の故に、両者の相違が曖昧になっている。スミスは、ここでの奴隸は、一種の土地占有者であり、小作人であり、奴隸より緩かな支配下にある者としている。だとすれば、それは奴隸とは質的に異なるものである。しかし他面、それは一切の生産物を領主に収奪され、財産をもつことが許されず、最低の生活が保証されているにすぎない、とされている点では、封建制下の他の農民と異なり、むしろ奴隸に近い。しかし、奴隸といふことの故に、前者ではなく、むしろ後者として、すなわち奴隸として、実際には叙述されている点は、注意されねばならぬ。

奴隸のあとをうけて、現われてきたのは、第二段階の折半農である。折半農は、奴隸に比して一大進歩である。というのは、彼は財産をもちうるばかりでなく、土地生産物の増大に応じて、その分前を増大しうるからである。したがって「両者には根本的な差異がある」とスミスは断定する。この段階にいたって、はじめて農業生産力は発展しうる可能性が生ずるのであり、この点の認識は重要である。しかし、折半農も、土地改良のために自己のストックを投下する意欲は決して強いとはいえない。なぜならば、全く投資しない領主が、この場合も、かならず生産物の半分を手に入れるからである。この段階でも、やはり農業生産力の発展を妨げているのは、他ならぬ領主の地代収奪ということである。

これにつづいて、次第に起ってきたのは、自己の資財をもって耕作し、一種の地代を支払う本来の意味での農業者である。これは折半農に比して更に大きな進歩である。彼等が長期の借地権を確保するとき、農地改良のために、資本を投下することを有利と考える。しかし、その借地権は久しい間、はなはだ不安定であった。彼等が領主の暴力によって不法に立退かされた場合、その救済のための訴訟はきわめて不備であった。したがって、この段階においても、土地改良と農業の発展が急速に実現されることは、むづかしかった。

このようにスミスによれば、封建制度の下では、農業は停滞的な発展をみるにすぎず、農民形態の三つの発展段階のいずれにおいても、土地改良と農業の発展に阻止的な役割をはたしたのは、他ならぬ封建的土地所有そのものである。

った。そこでは、まさにスミスの強調するごとく「農業者と土地所有者との関係は、あたかも借金をもってやっている商人と自己の貨幣をもってやっている商人との関係のごときものである。……農業者の耕作する土地は、所有者の耕作するものに比して、その改良はのろい、けだし前者においては生産物の大部分が地代に費されるからである。」<sup>⑤</sup>それのみではない。この過重な地代負担の他に、耕作権は不安定であり、さらに慣習的奉仕や道路賦役など、おびただしい封建的諸束縛が相重なり絡みあって、農業の改良・発展に阻止的な作用をしたのである。

しかしながら、いまや農業発展の第三段階であるヨーマンリーおよび農業者の段階にいたって、借地権の不安定は次第に解消され、農業者は農地への資本投下の意欲をしめしはじめる。この点において他のヨーロッパ諸国に比して際立った進歩をとげているのは、イギリスである。

すなわち、「非常に長期の借地権を保証する法律は、イギリス王国特有である」、「イングランドは全ヨーロッパでヨーマンリーが常に最も尊敬を受けている国である」、「かくしてイングランドにおいては小作人の安全なることは領主に劣らない」という状態であった。このようにイングランドのヨーマンリーは、まさに独立自由な自営農民であった。そして「ヨーマンリーにとってかくの如く有利な法律、（不動産占有回収訴訟法 *action of ejectment*）と習慣とは、今日のイギリスの大をなすに貢献したこと恐らくかの誇るべき商業に関する規則の全部に勝るものがあるであろう」<sup>⑥</sup>とさえ、スミスをしていわしめているのである。

それでは、このような長期借地権と安定した地位を、農業者に確保させ、農業の改良と発展を可能ならしめたのはいったい、いかなる契機を媒介とし、またいかなる発展のコースによってであるか。スミスは、その契機は、都市の発展と「外国貿易の子孫」としての製造業の発展にあった、という。すなわち、その過程において次第に封建的土地所有がほり崩されていくのであり、農業者の長期借地権と地位の安定が確保されていくのである。そして、その結果

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

富大経済論集

として、また「農業の子孫」としての製造業が展開されていくのである。それが、第三、第四章の分析対象なのである。

註③ W. o. N. op. cit., Vol. I, P. 365 大内訳、第二分冊、一九九頁。

④ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 369 大内訳、第二分冊、二〇八頁。

⑤⑥ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 367 大内訳、第二分冊、二〇三—四頁。

#### 四 第三篇について

ローマ帝国没落後の大小都市の住民は、はじめ農村の住民よりもいい地位にあったわけではない。しかし、都市の住民は、農民にくらべると、はるかに早く自由と独立を獲得した。それは、市民自身が、彼等の都市の徴税を請負うことによってであった。この都市の徴税請負権は、はじめは期限付であったが、次第に世襲的、永久的になり、また定額の賃貸料と引換えにあたえられた免税の特権も永久的になってきた。かくして、これらの都市は自由市と呼ばれるようになった。さらに種々なる特権を次第に獲得し、またその上に、市会と民政長官を有する特権、行政規則をつくる特権、自己を防衛するための特権および司法権をも獲得し、かくして完全な特権都市が成立する、という。

農村では、農民がなおあらゆる暴政にさらされていたとき、このようにして都市には秩序と善政、また個人の自由と安全が確立したのである。かくして都市の住民は、その勤勉の成果を享受し、彼等の地位は次第に向上しうるのであり、その当然の結果として、「生活必需品はもとより、便益品もまた奢侈品をも得ようと努める」のである。こうして生活必需品以上の物を目標とする産業は、普通、農村で一般に営まれる以前に都市で成立するのだ、という。ス

ミスにおいて、このように特権的自由都市の性格を、農村での「領主—農民」関係の純封建的なものと異なる「秩序と善政、個人の自由と安全」の確保されているものとして、その進歩的意義の強調されている点は、注意されねばならない。

さて、右のような精巧製造品工業の成立以前、都市は、その生活資料およびその産業の材料を近辺の農村からえなければならなかった。しかし、海岸または航行自由な河川の近くの都市は、必ずしもそれを、附近の農村からえなければならぬというわけではない。都市は、はるかに広汎な地域、遠隔の地方から、生活必需品、材料または生産手段を入手することができる。かくして商業都市の住民は、富裕な諸地方あるいは諸外国から精巧な製造品や高価な奢侈品を輸入して、これを以って大領主の虚栄心を満足させたので、領主は、その所領地の大量の粗生々産物をもって、それらを買った。こうして精巧製造品にたいする趣味が一般化すると、商人はその運送費を節約するために、次第に同種の製造業を自国内に設けようと努力するようになる。「これが、ローマ帝没落後に、西ヨーロッパの諸地方に遠方販売の最初の製造業が設立された由来である」<sup>⑤</sup>とスミスは主張する。またこれは「同種の製造業を真似て設立され、特定の商人または企業者の資本のいわば暴力行為によって移入されたもの」といってよい。すなわち、このような製造業は外国貿易の子孫、offspring of foreign tradeである<sup>⑥</sup>という。（傍点—淡路）

しかし、この「外国貿易の子孫」としての製造業と異って、遠方向の製造業が、時として、「最も貧窮蒙昧の国においても常に行われている家庭的粗雑手工業が漸次に改良され、自然に、いわば自力で成長して出来上ることもある」<sup>⑦</sup>。こういう製造業は、国内産の材料に加工し、海岸や一切の水運から相当へだたった内地で、改良進歩をとげた。というのは、そこでは陸運の経費がかさみ、河川の便がないから、農産物の剰余を各国に輸出することは困難である。したがって、そこでは食糧は豊富で安価となり、多くの職工が近くに住みつくようになる。このような農村が、

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

富大經濟論集

もし封建的土地所有から解放されているならば、「土地の豊かさが製造業を生み、製造業の進歩が土地に反作用して、更にその豊度をますますにちがいない。製造業は、はじめは近隣にのみ供給するが、その製造品が改良されて精巧になるにしたがって遠い市場へも供給される。」<sup>⑤</sup>スミスは、そのような例として具体的に「リーズやハリファックスやシエフイールドやバフミンガムやウルヴァハムプトンの製造業は、かくして自然に、いわば自力によって成長したのである。これらの製造業は農業の子孫、offspring of agricultureである」と断定している。

- 註 ① W. o. N. op. cit., Vol. I p. 377 大内訳、第二分冊 一二二頁。  
 ② W. o. N. op. cit., Vol. I p. 378 大内訳、第二分冊 一二五頁。  
 ③ W. o. N. op. cit., Vol. I p. 379 大内訳、第二分冊 一二五—六頁。  
 ④、⑥ W. o. N. op. cit., Vol. I pp. 380—81 大内訳、第二分冊 一二七—八頁。  
 ⑤ W. o. N. op. cit., Vol. I p. 381 大内訳、第二分冊 一二九頁。

この箇所について、大塚氏は次のごとくいう。「ここでスミスの語を引用するのは固より史料としてではない。その中には見られるごとく、かなりの不正確さを含んでいる。併し私はスミスの透徹した史眼にむしろ驚きの眼を見瞠るものである。」

(大塚『序説』二六七頁)

しかし、「農業の子孫」としての製造業が、このように展開されたのは、けっして都市の商業および「外国貿易の子孫」と無関係にはなかった。逆にそれは、「外国貿易の子孫」としての製造業の発展を媒介としてであった。すなわちスミスは、右の文につづいていう。

「ヨーロッパの近世史においては、この類の製造業の発展と改良とは外国貿易の子孫たるものに比して一般に後塵を拝した。例えば、上述の場所に現在繁栄している製造業が外国向に適したものを製造するようになる一世紀以上も前に、イングランドはスペインの羊毛を以って作る高級織物の製造において有名であった。かかる第二類の製造業の

発展と改良とは、各国貿易とそれによって直接に導入された製造業の最後にして最大の結果たる、農業の発展と改良とをまけて始めて起りえたものである」といい、「私はこの点を進んで説明しようと思う」と第三章を結んでいる。そして第四章「都市の商業はいかに田舎の改良に貢献したか」に移るのである。

第四章では、都市の商業および製造業が、田舎の改良と耕作に貢献した方法は、次の三つであった、という。第一、都市は地方の粗生生産物にたいして常設の大市場を提供して、地方の耕作と進歩を推進した。第二、都市の住民がえた富は、田舎の土地買上げに使われた。商人は、普通田舎のジェントルマンとなりたがるものであり、またそうなれば多くの場合、最良の改良家となる、という。封建領主と異って、商業活動は商人をして「秩序をたて、経済を守り注意深くするという習慣は、利潤をあげ成功をおさめつつ、改良計画を遂行するのにヨリ適した人物たらしめるのである」<sup>⑤</sup>。この主張はスミスが、都市の商人を、彼が地主になった場合をも含めて、封建領主と異質なものとして把えその進歩的役割を、いかに高く評価にしているかを物語るものである。しかし、その反面、彼等の積極面も、いわば彼等の特権都市の範圍内においてのことであり、その企業も基本的に封建領主ないし国家権力と結びつく特権による独占を求める性格のものであった点の、スミスによる重視は見逃されてはならない。

第三に、「商業と製造業は、これまで隣人に対して不断の戦争状態をつづけ、彼等の上長に対して奴隸的従属の生活をしていた田舎の住民の間に漸次、秩序と善政とを、そしてそれに伴って個人の自由と安全とをもたらしめた」<sup>⑥</sup>。この封建的支配を崩壊させ、個人の自由と安全の確保において果たした役割を、スミスは「この点は、あらゆる結果の中で何物にもまして重要である」と強調している。

それでは、いったいそれは、如何なる過程を経由してであるか。その点を検討しよう。

外国貿易が発達せず、また精巧製造業もまだ存在しない国においては、封建領主は、彼の地代としての農産物を、

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）



多数の従者や家の子 retainers and dependants の生活維新や款待のために費した。というのは、領主にとって、この段階では彼自身の消費後の残余と交換すべき何物もなかったからである。また封建領主に従属している点では、土地占有者である小作人 tenant at will も同様であった。「両者の生活は、いずれも領主の好意に基くものであって、それが何時までつづくかは彼の御機嫌次第なのである」という。そしてスミスは、次のごとく主張する。「かくの如き事情の下において、大土地所有者が、彼の小作人および従者にたいして必然的にもっていた權威こそ昔の権力の基礎であった。彼等は当然に彼等の所領地内に生活するすべての人にたいして平時の裁判官、戦時の将師となった。」<sup>⑭</sup>

このようにスミスは、領主が農民から地代を收奪し、その地代たる農作物をもって、従者や家僕の生活を維持し、款待することに、封建権力と權威の基礎のあったことを、明示している。この状態にあっては、農民はその労働成果の大部分が領主に收奪されるが故に、農民の富裕を起点とする農↓工↓商の発展は困難である。ところが、外国貿易および都市の製造業の発展が、この封建権力を次第に崩壊させていく。それは、外国貿易および精巧製造業が、領主に彼の全剰余生産物と交換しうる商品を提供することによってである。かくして、両者の間で生産物が交換されはじめると、領主は、彼の奢侈欲望を充するために次第に財政は窮迫していく。しかも領主の子供らしい奢侈欲望には限りなく、彼の経費は増大の一途をたどり、ますます財政は窮迫する。その対策としてとられるのが、従者・家僕数の減少であり、また、農民へのいつそうの收奪強化である。

しかし、領主の地代引上げに対して、農民側は無抵抗、無条件に応ずるというわけではない。一定限度以上になると、地代引上げの代償として、長期耕作権を農民にあたえざるをえなくなる。その点、スミスの興味ぶかい主張を聞こう。

「領主の小作人が、これ（地代引上）に同意するためには、どうしても一つの条件が充されねばならなかった。そ

れば、彼等の所有を保障する期間を充分に延長し、もつて土地の改良にいかなる支出をなしても、すべて利潤を伴つて回収されうるようにしたのであった。領主の浪費的な虚栄心は彼をしてこの条件を甘受せしめた、これが長期借地権契約の起源である。<sup>⑧</sup>

かくして、大土地所有者は次第に、その権力と權威を失しない、小作人は、独立の自営農民になっていくのである。しかもこれは、外国貿易に由来する、奢侈欲望という領主の「最も劣等にして最もけがらわしい虚栄心」の結果としておこつたことであつた。かくしてスミスは、結論的にいう。

「ヨーロッパの大部分を通じて都市の商業と製造業が、田舎の改良と耕作の結果としてではなく、その原因および縁由となつたのは以上のごとき次第によるのである」と。<sup>⑨</sup>

このようにスミスは、彼の「自然の進路」の起点である独立な自営農民層の広汎な形成は、歴史的には、逆に、外国貿易↓都市商工業↓領主の奢侈欲望↓領主の財政窮乏↓従者・家僕数の縮少、地代引上↓長期耕作権の獲得、という経路をたどつて展開されてきたことを、力説するのである。したがつて、この自営農民を基礎とする「農業の子孫」としての製造業の展開自体は、外国貿易の発展を契機とし、それに媒介されて、なされてきたのである。

さて、いまやヨーロッパ諸国はイギリスを先頭として、次第に封建的土地所有を崩壊させ、アメリカ型の発展経路をとるべき段階に立ちいたつた。しかも、このスミスの時代において、なおかつ「自然の進路」の貫徹を妨げ、農村工業の全き発展と、国内市場の完成と、そのおのずからなる結果としての外国貿易の展開をはばみ、今や全ヨーロッパを危機の狀態に陥れているのは何か。それは、特権的「商人と製造業者」のための政策体系である重商主義である。そして、この重商主義が真向から批判されているのが、第四篇である。そこでは、「農業の子孫」としての製造業と、「外国貿易の子孫」としての製造業が対決されているのであり、スミスは、前者Ⅱ「自然の進路」の思想でも

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

富大経済論集

って、後者Ⅱ「人為の制度」を批判するのである。

- 註 ⑦ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 381 大内訳、第二分冊 二二九頁。  
⑧ ⑨ ⑩ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 383 大内訳、第二分冊 一三一—一三三頁。  
⑪ ⑫ W. o. N. op. cit., Vol. I, pp. 384—5 大内訳第二分冊 一三五頁。  
⑬ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 388 大内訳、第二分冊 二四二頁。  
⑭ W. o. N. op. cit., Vol. I, p. 390 大内訳、第二分冊 二四五頁。  
⑮ 前掲拙稿、「スミスの貿易理論」(中・下)参照。

五 若干の問題点

以上のように、スミスは、ヨーロッパの歴史において、農村工業の展開が、逆に、外国貿易↓都市商工業↓農業という転倒のコースによってなされてきたことを、強調する。しかし彼の主張の眼目は、転倒のコースによってではありながらも、展開されてきた農村工業が、「外国貿易の子孫」としての製造業を圧倒すること、すなわち「自然の進路」による「人為の制度」の圧倒においてこそ、一国経済の順調な発展、産業資本の確立を見透している、ということである。

しかも、その際に見逃されてならぬのは、次の点である。それは、農村工業の展開が、単純に、外国貿易および都市の製造業の発展を原因として、いわば外国貿易一元論的に説明されているのではないことである。スミスは、外国貿易を契機とする農民の安定した耕作権の獲得を問題にする場合、その論理展開の基礎を、封建領主と農民の対抗関係においている。すなわち、ヨーロッパの歴史の発展は、転倒したコースの故に、停滞した緩慢なものたらざるをえなかったが、その原因は、封建的土地所有による領主の耕作農民にたいする収奪であった。封建制度下の農業の発展

をスミスは、この「領主—農民」の対抗関係の形態変化において考察した。農民形態は、奴隸—折半農—農業者の三段階を経由して、農民は次第に安定した耕作権を確保してきた。この「領主—農民」の対抗関係に、いかなる影響をあたえるかという観点から、外国貿易の役割が問題にされているのである。スミスにおいては、くり返していえば、ヨーロッパの現実の歴史において、農村工業の展開は、決して無媒介になされたのではなく、まさに外国貿易の発展を契機とした点が強調されているのは、白杉説のごとくである。しかし、そのことは、白杉氏の考えられるごとく、農村工業展開の内的要因として外国貿易を考え、外国貿易の発展のいわば直線的結果として、農村工業の展開がなされた、と主張されているのではない。スミスにおいては、外国貿易の役割がいかに重視されているようにとも、それは「領主—農民」の基本的対抗関係を激化させる、外的条件として考えられているのである。

もっともスミスにあつては、ドップ・スウィージー論争で、ドップによってなされたごとく、「領主—農民」の対抗関係を内的矛盾 *internal conflict*、外部商業を外的力 *external force* というように明確に規定されてはいない。なるほどスミスの場合、「領主—農民」の階級矛盾、とくに直接労働する農民の労働意欲を基本として、それを阻害するものとして領主による収奪が考えられ、この対抗関係の変化を三段階に分け、その推移につれて、次第に農民側の労働成果の享受しうる度合が増大し、したがって農民の労働意欲が向上し、また農業の改良・発展のなされる点は、考えられている。しかし、この三段階の推移の原因、契機は、スミスにおいて直接分析されてはいない。ただ三段階が区別され、各段階での労働者欲と、農業の改良・発展の相違が比較されているにすぎない。そして第三の、農業者・ヨーマンリーの段階においては、先行の二段階に比して、労働意欲と投資意欲には格段の相違がある、とされている。しかしこの第三段階においてもなお、農民は、完全な土地の耕作権・所有権をもっていないが故に、「小土地所有者」に比すれば、その農業改良の意欲は劣るとされている。そしてこの段階において、完全な耕作権・所有権を導

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

入する契機として外国貿易の役割が考えられているのである。したがって、この第三段階の「領主—農民」の対抗関係の展開は、まさに外国貿易↓領主の奢侈欲望を前提として、いわばそれを原因として直線的に説明されているといえる。その限りにおいて「領主—農民」の対抗関係を、基本的な内容的矛盾とする理解は弱いことはたしかだ。

この点は、「外国貿易↓領主の奢侈欲望」を原因として、それからの直線の結果として、農村内の商品経済、農村工業の展開、ということでないのはドップや高橋氏の主張のごとくである。そのような結果になるかどうかは、「領主—農民」の対抗関係と、その下で農民の商品経済がどの程度に展開されているかによるのである。外部商業にたいして、領主と農民のいずれの側が、イニシャチブをとって、それに対応するかにかかわり、両者の力関係のいかんによるのである。すなわち、農民的貨幣経済が次第に発展し、また農村工業が展開されるか、または、逆に、領主の農民支配が強化され、領主的貨幣経済が発展するかは、まさに内部構造と「領主—農民」の対抗関係の状況いかによって決定されるのである。したがって、外部商業によって一元的に決定されることではない。この点、スミスが外国貿易の影響をまさに、第三のヨーマンリーの段階において真正面から取上げているということは、その理解の深さを示すものとして見逃されてはならない。というのは、それ以前の段階では、外国貿易の影響も異った結果をもたらしたろうからである。

にもかかわらず、外国貿易の役割に関するスミスの論理展開は、ドップを批判するスィーजीにむしろ類似しているといえる。周知のごとくドップは、封建制下では、生産力の停滞という前提の上で、領主の収益必要の増加↓農民への収奪強化↓「領主—農民」の対立激化、ということに封建制崩壊の原因を求めている。これに対してスィーजीは、封建領主の収益必要の増加は封建的生産様式に固有のものではなく、むしろそれは、外部商業と都市生活の成長の副産物にすぎない、と批判している。すなわち、ドップの内的矛盾自体が外的力によって展開されざるをえない、

というのである。スミスは、外国貿易を原因とする、領主の奢侈欲望は「全く個人的な気まぐれ、最もつまらぬ虚栄心」であり、その満足のために、領主はその権力の基礎を失った、と主張する。これは、スティーラー説との照応を示すものである。しかし、奢侈欲望は、単に外国貿易に誘発された個人的気まぐれ、虚栄心ということだけで説明しうるかどうかは、疑問である。領主による收奪の強化は、彼に收奪されている農民、また他の領主との対抗上、まさにスミスのいわゆる「隣人との不断の戦争状態」と農民の「奴隸的従属状態」の故に、支配者としての権力を維持・拡大し、また誇示するために、必然的に要求されるものである。奢侈欲望ということも、この観点から追究されねばならない。けっしてそれは、外国貿易を原因とし、また領主の奢侈欲望として個人的虚栄心としてのみ、理解さるべきではない。

しかし私の強調したいのは、スミスにこのような欠陥があったことは確かだが、彼は、農↓工↓商と展開する「自然の進路」と、それを転倒した外国貿易↓都市商工業↓農業という「人為の制度」とを、原理的に対抗する二つのコースと考え、しかも前者による後者の圧倒においてこそ、一国経済の順調な発展と産業資本の確立を見透していた、ということである。ここに私は、マルクスの「二つの道」の理論の源流を見るのである。さらにまた、彼の農村工業の展開において、歴史的には、外国貿易とその子孫としての製造業の発展に媒介されていたが、ひとたび農民が安定した耕作権を確保し、それを基礎として「自然の進路」がたどられはじめると、農・工は相互に市場となり合うのである。この場合、商業は原理的には、ただ両者を媒介する従属的なものにすぎない。ここでは、商業資本による問屋制支配がなければ、この農↓工↓商の国内市場の展開がなされえない、というのではない。まさに原理的には、大塚氏のいう、内部商業・農民的貨幣経済の展開が考えられているのである。したがって、この展開は、まさにマルクスの「生産の者↓商人」のコースと同一の型のものである。

封建制より資本主義への移行における商業の役割について（淡路）

富大経済論集

ただ、ここでくり返えていえば、そのような農村工業の展開が、現実の歴史においては、外国貿易の発展を契機としてなされたことが、スミスにおいて豊かな歴史感覚をもって立体的に把握されているのである。この点に関して大塚、白杉両氏は、スミス理解において一面的であるといえるのではなからうか。白杉氏については、すでに述べた。大塚氏については、どうか。氏はスミスの「自然の進路」を次のように見事に要約される。

「まず封建的土地所有制のいちはい弱体化乃至分壊の結果として生ずる耕作農民の社会的向上、就中その中心にくつきりと姿を現わして来る独立自営農民（ヨウマン）、さらにそれに絡みあい踵を接して現われる『富める大農業者すなわちファーマー』、こうした歴史的、社会的地盤の上に、まず旧い封建的土地所有制下に見られなかったような労働生産性の高い農業が繁栄したのである。ところでスミスによれば、こうした労働生産性の高い農業、そこからおのずから流れでる農民の余剰を購買力として『農業の未裔としての工業』が繁栄しはじめる。而もこの工業も亦、旧いギルド的なそれと凡そ異って、労働生産性の高いものであり、ことにその中心にあるのはあの分業と協業にもとづく近代的経営形態たるマニファクトリがはつきりと現われて来る。（『国富論』第一篇・第一章、第三篇・第一章・第三章、参照）かような農↓工の相互的な結びつきを媒介する国内商業の繁栄。更にかような農↓工↓商業の内における充実からおのずから生ずる外国貿易の繁栄。これがスミスの『自然の順序』であった。」

みられるごとく、大塚氏による、「自然の進路」の把握は、スミスが重視した、その媒介としての外国貿易と「外国貿易の子孫」としての製造業の発展ということが、全く捨象されている。そして、自営農民の広汎な成立を自明の前提として、それを基礎とする農↓工↓商の展開があとづけられている。

「国富論」において、経済理論を扱う第一、第二篇の結論ともいべきは、まさに大塚氏の前掲の要約にみられる「自然の進路」の思想であることは、すでに反復強調した。しかし、この結論に依拠して、現実の歴史過程を検討する第

三篇は趣を異にする。経済理論の結論としての「自然の進路」が現実のヨーロッパの歴史において、いかに転倒されゆがめられてきたか。しかも、それにもかかわらず、いかにして「自然の進路」が結局は貫徹されざるをえないか。そして、その際に果す外国貿易の役割はどうか。こうした問題が、スミスにおいて、封建的土地所有を物質的基礎とする「領主—農民」の対抗関係を基本線として、立体的に追究されているのである。したがって、われわれが、歴史過程としての「移行」を問題にするときは、スミスの「自然の進路」を根拠におきつつも、それが現実にはいかなる形態をとって展開されるかが検討されねばならない。

註① ドップ・スージー論争については、“The Transition from Feudalism to Capitalism” A Symposium by Sweezy, Dobb, Takahashi, Hill, Hilton. また「過渡期の問題」(『思想』一九五一年七月号)などを参照。

② 『資本論』第三卷、第二十章、および前掲、拙稿「移行の『二つの道』」、参照。

③ この点、註①のシンポジウムに参加したヒルトンの主張は、当然のことを確認したにすぎないが、やはり重視すべきであるすなわち、封建支配者は、基本的には、彼の支配下にある農民および競争者としての他の領主たちに対抗して、権力を維持し拡大するために、その封建地代を引上げざるをえない、のだという。(六九頁)

④ 大塚『近代資本主義の起点』一一一—一二頁。

封建制より資本主義への移行における商業の役割について(淡路)